

「世界に目を向ける」(二年第二単元)

「考える力」「想像する力」を伸ばす工夫—

西条市立北中学校教諭 野村 光子

1 はじめに—「世界に目を向ける」ことの大切さ
国際化が進むに従って、生徒たちの生活を取り巻く環境も急速に変化してきている。外国の文化に触れる機会が多くなり、海外旅行やそこの生活経験をもつ者も増えてきた。ところが一方では、本や新聞を読まない、ニュースを見ないという生徒が少なくない。自分たちの生活に直接かわりがなければ、たとえそれが隣の国の出来事であろうとも、世界の状況など関心がないのである。

しかし中東や近隣諸国において緊張した国際情勢が続く今日、わたしたち日本人も、世界的な視野から自分たちの立場を明確にすることが求められてきている。まずは世界全体に広く目を向け、多様な価値観や考え、異なる文化があることを知り、それらを尊重しながら、自分たちは周りとどのようにかわつていけばよいかを考えていかなければならない。国際社会の中

の日本の在り方、自己の在り方を考えるとき、その基盤となるのが国語力であろう。母語である国語の力を身につけ、日本人としての自己を確立し、自らの考えを論理的に言葉でまとめ、発信していくことが、これからの国際社会に要求されるのではないだろうか。

2 教材文「伝え合い」について

教材文の「伝え合い」では、言葉が通じてしまうからこそ、単純な事態が複雑な事態を招き、誤解が生じてしまうということが、「羊」や「ありがとう」という言葉を例に具体的に述べられている。この文章を読んだとき、私はある教え子から聞いた話を思い出した。大学生だった彼女がケニアを訪れたときの話だ。ケニアなど遠い国の話だと思っていた私にとって、「ケニアには複数の民族がいて、それぞれの民族語で話していること。ステイ先で牛の値段を聞かれて困ったこと。」

など、彼女から聞く体験の数々はとても神秘的で新鮮な驚きであった。話を聞くまでは、言葉さえ通じれば、意思の疎通が図れるものと単純に考えていたからだ。「伝え合い」は、異なる環境や文化、生活習慣の違いを知るうえで、彼女の話と共通するところが多かった。そのような外国の人たちと接した人から体験談を聞き、自分の生活と考え合わせてみることは、異なる文化や多様な価値観、考え方を認め、尊重する態度を育てるよいきっかけとなる。

この「伝え合い」の学習を通して、生徒たちが筆者の悩みや驚きを理解し共感することで、国際社会に生きる自分たちが、相互に理解し合う社会を形成するにはどうあるべきかを考え始めるようになればと考えた。「伝え合い」は、自分の目線だけで物事をとらえるのではなく、広い視野に立つて物事を見つめることの重要性を認識させるのに適した教材である。

3 実践内容

(1) 教材化の視点

少ない国語の授業では、教材の視点を明確にし、できるだけ学習を焦点化する必要がある。そこで、「伝え合い」を中心に読みを進め、「マドゥーの地で」は扱わ

ず、「伝え合い」をより深く読み取ることができる補助教材を用意した。そこでは、「論理の展開を押さえ、筆者の体験や現地の人々の状況や思いなどを読み取り、広く世界に目を向け、自分とのかかわりを考える」とをねらいとした。

また、「書くこと」の情報を集めることも、インターネットを中心に扱い、時間をかけないようにした。分量もワークシートの最後の部分で百五十字程度とした。「話すこと」は別の機会に譲った。

その中で特に生徒たちに気づかせたかったことは、「一つ一つの言葉は、その言葉を母語とする人たちの伝統的な文化や、その人たちの取り巻く自然環境、人間関係などが深く結び付いている」ということである。背景にある文化や風俗習慣への理解なくして、円滑な意思疎通は難しいということを理解させ、多様な考え方を認め、広い視野を身につけるきっかけにしたいと考えた。そこをしっかりとおさえることが、意見文を書くための情報を集めるときにも役立つと考えたからである。

(2) 指導の手立て

補助教材の工夫

指導にあたっては、ケニアでの体験をもつ教え子の

体験を補助教材として使用することにした。(「ケニアでの出来事」P22・23を参照)生徒たちにとって、「伝え合い」の内容は、ともすれば遠い世界での話として観念的に受け止められかねないが、自分たちの周りにも、「伝え合い」の筆者と似た体験をもつ人がいるのを知ること、文章で語られている世界を身近なものとしてとらえ、自分とのかかわりで考えるようになるのではないかと考えた。

補助教材を読んだ生徒の感想例

。一つ一つの簡単な言葉でも、自分が伝えようとしているものと、相手がイメージするものとは違うので、異なる文化の人に、自分の文化を伝えるのは難しいと改めて思いました。自分が「これくらい当たり前のことだ。」と思って言っても相手に「この人、何を言っているんだろ?」と受け取られるかもしれません。私は、そういう経験をすることがありませんが、自分がそういう立場に立ったときは、相手がどういう対応をするかを考え、接したいと思いました。

。自分たちにとっては当たり前なことが通じないといつのは、とてもどかしいと思う。国の文化や生活によって、その国の常識も違ってくるから、日本では常識であっても、他の国では非常識なことだったりすることがけっこうあると思う。他の人と価値観が異なるのは仕方ないから、外国の人と接するときは自分の常識にとらわれずに接することが大切だと思った。

ワークシート例

世界に目を向けよう (第1・2時)

①「世界に目を向けよう」というテーマで、それぞれ課題を決め、情報を集めて、自分の考えをまとめてみよう。

②自分の考えをまとめた後、グループで話し合おう。

③グループで話し合った後、クラス全体で話し合おう。

④自分の考えをまとめた後、グループで話し合おう。

⑤グループで話し合った後、クラス全体で話し合おう。

⑥自分の考えをまとめた後、グループで話し合おう。

⑦グループで話し合った後、クラス全体で話し合おう。

⑧自分の考えをまとめた後、グループで話し合おう。

⑨グループで話し合った後、クラス全体で話し合おう。

⑩自分の考えをまとめた後、グループで話し合おう。

⑪グループで話し合った後、クラス全体で話し合おう。

⑫自分の考えをまとめた後、グループで話し合おう。

⑬グループで話し合った後、クラス全体で話し合おう。

⑭自分の考えをまとめた後、グループで話し合おう。

⑮グループで話し合った後、クラス全体で話し合おう。

⑯自分の考えをまとめた後、グループで話し合おう。

⑰グループで話し合った後、クラス全体で話し合おう。

⑱自分の考えをまとめた後、グループで話し合おう。

⑲グループで話し合った後、クラス全体で話し合おう。

⑳自分の考えをまとめた後、グループで話し合おう。

㉑グループで話し合った後、クラス全体で話し合おう。

㉒自分の考えをまとめた後、グループで話し合おう。

㉓グループで話し合った後、クラス全体で話し合おう。

㉔自分の考えをまとめた後、グループで話し合おう。

㉕グループで話し合った後、クラス全体で話し合おう。

㉖自分の考えをまとめた後、グループで話し合おう。

㉗グループで話し合った後、クラス全体で話し合おう。

㉘自分の考えをまとめた後、グループで話し合おう。

㉙グループで話し合った後、クラス全体で話し合おう。

㉚自分の考えをまとめた後、グループで話し合おう。

㉛グループで話し合った後、クラス全体で話し合おう。

㉜自分の考えをまとめた後、グループで話し合おう。

㉝グループで話し合った後、クラス全体で話し合おう。

㉞自分の考えをまとめた後、グループで話し合おう。

㉟グループで話し合った後、クラス全体で話し合おう。

㊱自分の考えをまとめた後、グループで話し合おう。

㊲グループで話し合った後、クラス全体で話し合おう。

㊳自分の考えをまとめた後、グループで話し合おう。

㊴グループで話し合った後、クラス全体で話し合おう。

㊵自分の考えをまとめた後、グループで話し合おう。

㊶グループで話し合った後、クラス全体で話し合おう。

㊷自分の考えをまとめた後、グループで話し合おう。

㊸グループで話し合った後、クラス全体で話し合おう。

㊹自分の考えをまとめた後、グループで話し合おう。

㊺グループで話し合った後、クラス全体で話し合おう。

㊻自分の考えをまとめた後、グループで話し合おう。

㊼グループで話し合った後、クラス全体で話し合おう。

㊽自分の考えをまとめた後、グループで話し合おう。

㊾グループで話し合った後、クラス全体で話し合おう。

㊿自分の考えをまとめた後、グループで話し合おう。

㊿グループで話し合った後、クラス全体で話し合おう。

生徒たちの感想を読むと、異なる文化環境にある国々との相互理解を図るうえで、言葉のもつ意味をその言葉の背景にあるものを含めて学ぶこと、そして、自分の側からではなく相手サイドに立って物事を見つめることが大切であると、生徒たちが気づいたように思う。

ワークシートの活用

内容の理解を助ける手だてとして、教師側であらかじめソマリアやケニアの状況についてインターネットなどで調べておき、情報を関係資料として提供したり、ワークシートを配布したりした。生徒たちが自分の意見をもつためには、まず筆者の考えを理解しなければならぬ。しかし、生徒たちの読解力には差があり、正しい理解の困難な者もいる。そこで、筆者の体験を丁寧に読み取り、その体験に基づいて考えたことを正確に理解させる手だてとしてワークシートを利用した。

(3) 指導の流れ

限られた少ない時間数の中で指導の焦点化を図るために、次の四つの観点から学習を進めていった。

第一次(第1・2時)

。筆者の論理の展開をとらえ、自分の意見をもつ。

。補助教材を読み、筆者の体験を通して自分の考えを深める。

第二次(第3時)

。「世界に目を向ける」というテーマで課題を決め、インターネットを活用して情報を集める。(足りない分は、休み時間を使ったり、教師が資料を用意したりした。)

第三次(第4時)

。情報をもとに、自分の考えを意見文にまとめる。

第三次では、ユニセフ、世界紛争、地雷問題、外国から見た日本人のイメージなど、さまざまなテーマをもとに意見がまとめられており(上のワークシート参照)、第一次で学習したことが関心を高めるのに大きく影響したと思われる。

4 おわりに

生徒たちはこの学習を通して、国語(言葉)の重要性を改めて認識するとともに、相手の表情や態度から言葉に表れていない言外の思いを察する力、すなわち「想像する力」の必要性を感じ取ったであろう。広く世界に目を向け、そこに生きる人々から学ぶ姿勢を、生徒たちが今後の生き方に生かしてくれるものと信じている。

ケニアでの出来事

私が大学の夏休みを利用してケニアを訪れたのは一九九七年のことでした。

ごく普通の観光客とは少し違い、青年海外協力隊などを企画しているJ A I C A（日本国際協力事業団）で、友人のお父さんが、ケニアの植林のために働いていたので、半分それを見学させてもらうという旅でした。

そういうわけですから、J A I C A が植林事業を行っている村で、農家の家に一泊させてもらうことができました。村は、草木もまばらな、いわゆるステップ気候特有の景観でした。泊めてもらったのは、夫婦と小学生の子どもが二人の四人家族の家でした。家には電気も水道もありますが、雨水を蛇口付きのタンクに溜めたり、大きなバッテリーにつないでラジオや電球を点けていたり、生活を快適にする工夫をしている様子が伺えました。

父親は植林センターで働いている人で、英語が話せるので、いろいろ日本のことを聞いてきました。しかし、生活感覚の違いのため、相手が質問してきそうなことを私が予測できないので、会話はなかなかグクシャクしたものになってしまいました。

父親「〇〇は、日本語でなんと言った？」

私「××です。」

父親「日本では、牛一頭いくらするんだ？」

私「……。」

ほぼ成人している大人の私が、牛の値段をすんなり答えられないことが、彼にはとても不思議なことのように感じた。村の人は、ほとんど全員農業を営んでいますし、牛も一頭くらいは飼っています。そんな、どんな家庭にもいるような身近なものの値段が言えないなんて、なんて世間知らずな、と思わ

れてしまったのかもしれませんが、日本に置き換えれば、自動車の大体の値段が言えないようなものだったでしょう。

多くの日本人が「牛」と言われて思い浮かべるのは、テレビで見る、どこかの牧場のホルスタインでしょうが、この村では、自分の家の庭にいる牛です。

「日本人は主食に何を食べているんだ？」と聞かれて「ライスです。」と答えたときにも、もどかしさを感じました。単語としてはライスで間違っていないものの、彼らが思い浮かべるライスは、おそらくただ一回っている細長いインディカ米で、しかも原始的な貧弱な品種なのでしょう。「あんなものを毎日食べるのかい？」という顔をされていました。相手が見たこともない日本米を、言葉でちゃんと伝えるのはとても難しいことだと感じました。

牛、米、という簡単な言葉に対して、私たちは何も考えることなく、その言葉が意味するものを思い浮かべることができます。しかし、思い浮かべることが簡単であればあるほど、その一つ一つの言葉に、自分という一人の「個人」の今までの経験が、ぎゅっと詰め込まれているということを忘れてしまいがちです。家に泊めてもらったケニアの人のこれまでの経験も、私の経験も、実は非常に膨大で、言葉にし尽くせるものではありません。たとえ、共通言語を話せたとしても、お互いの言葉の意味を本当に正確に理解するには、たくさん時間と手間をかけて、お互いの社会や文化や個人的なことを知らなくてはならないでしょう。

言い換えれば、どんな単純な言葉であっても、その言葉のもつ意味に、新しい意味や価値観をどんどん加えていけることが、文化の異なる人と触れ合う醍醐味の一つではないでしょうか。